

体験版

褐色ろりさきゅばすの  
ぷにあしで墮とされちゃう！





ついに、魔王を倒した！

魔物に姫がさらわれて以来

数多の兵士、冒険者が魔王城へ挑み

そして誰も帰って来なかった

困り果てた王は

人界の財、知恵、武具を結集し

ひとりの若者を育てた

その若者の旅立ちの日

ついには女神の祝福まで受け

一人の勇者が誕生した

城内に溢れる数多くのモンスター

配下の八王、四将軍

そして魔王

そのすべてを倒し

姫を救出した

だが、姫様は言う



勇者様、まだ他にも  
囚われた者がいるようなのです

どうか助けてあげては  
頂けませんか



食事などを  
さらに奥へと運ぶ様子を  
目にしていたという

ひとまず邪悪な気配が  
消え去ったとはいえ  
ここは敵地のただなか

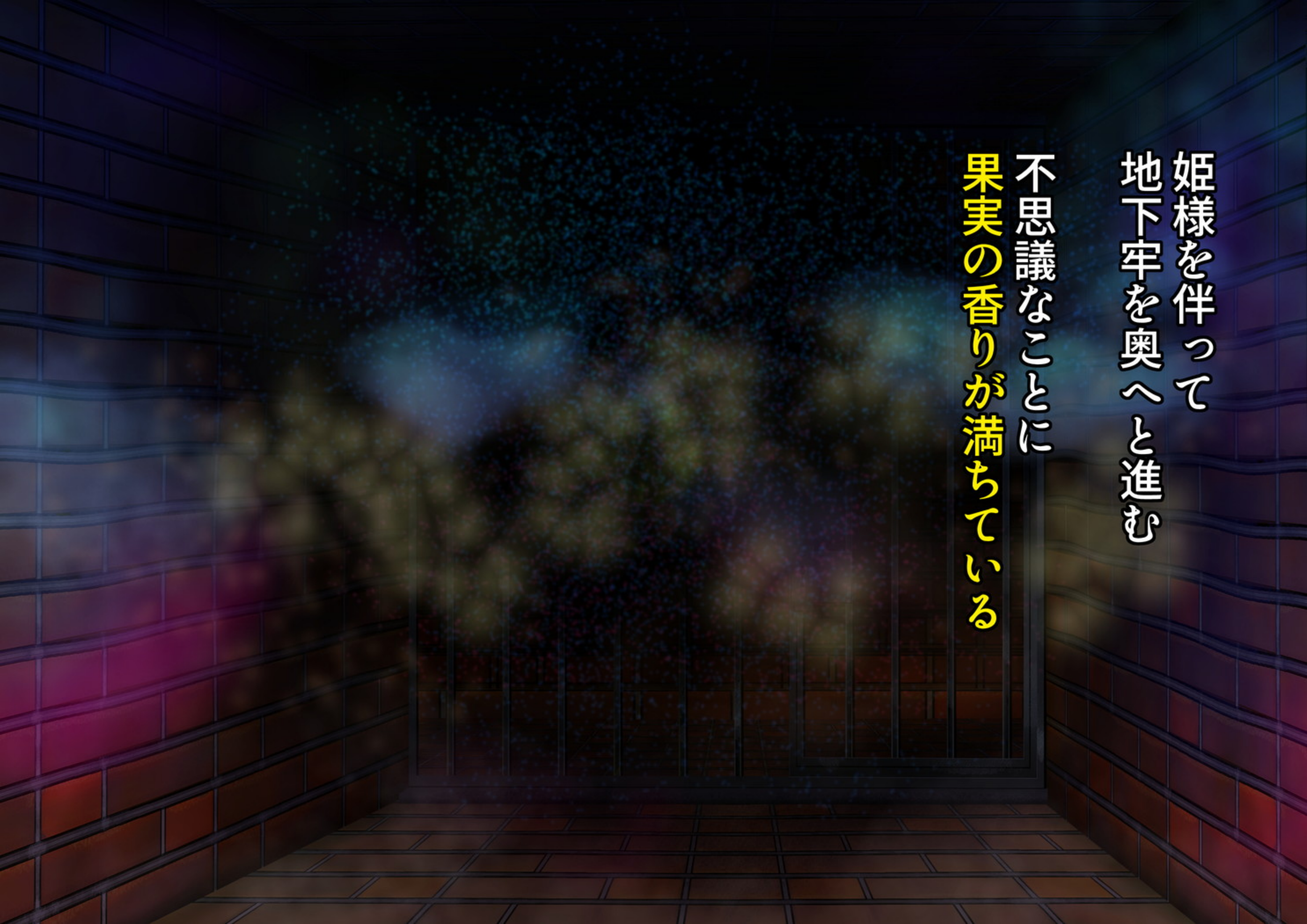
何が起こるかわからない



姫様を伴って  
地下牢を奥へと進む

不思議なことに

果実の香りが満ちている





姫様を伴って  
地下牢を奥へと進む

不思議なことに

果実の香りが満ちている

高揚感、万能感を感じる

その香りは奥にいくほど  
濃くなっていく

用心しながら

さらに奥へと進むと

：何者かの気配がする

まだ顔は見えないが  
息をのむ様子が伺えた



姫様を伴って  
地下牢を奥へと進む

不思議なことに

果実の香りが満ちている

高揚感、万能感を感じる

その香りは奥にいくほど  
濃くなっていく

用心しながら

さらに奥へと進むと

…何者かの気配がする

まだ顔は見えないが  
息をのむ様子が伺えた

片手に剣を構え  
探るように  
ゆっくり近づくと



姫様のいた牢と比べ  
いやに厳めしく  
猛獣でも入りそうな  
大きな牢には





姫様のいた牢と比べ  
いやに厳めしく  
猛獣でも入りそうな  
大きな牢には

一人の可憐な少女がいた

「こんにちはわ  
おにいさん？」





# 1

人を超えた力、それは  
ありとあらゆる者を惹きつける  
善き者、悪しき者、それ以外も





「おにいちゃんが  
魔王倒したんだ？」





「おにいちゃんが  
魔王倒したんだ？」

「うよいんだねー♪」

人外の少女は  
心から嬉しそうに  
ころころと笑う





どうやらこの子も  
魔王に囚われていた  
一人で間違いなさそうだ





どうやらこの子も  
魔王に囚われていた  
一人で間違いなさそうだ

ふいに重く、固い音が牢屋に響き  
目が足かせに吸い寄せられる





どうやらこの子も  
魔王に囚われていた  
一人で間違いなさそうだ

ふいに重く、固い音が牢屋に響き  
目が足かせに吸い寄せられる

「くす、そうなの  
繋がれてちゃってて」





少女が鎖に繋がれた  
痛ましい姿  
なのに何故だろう





少女が鎖に繋がれた  
痛ましい姿  
なのに何故だろう

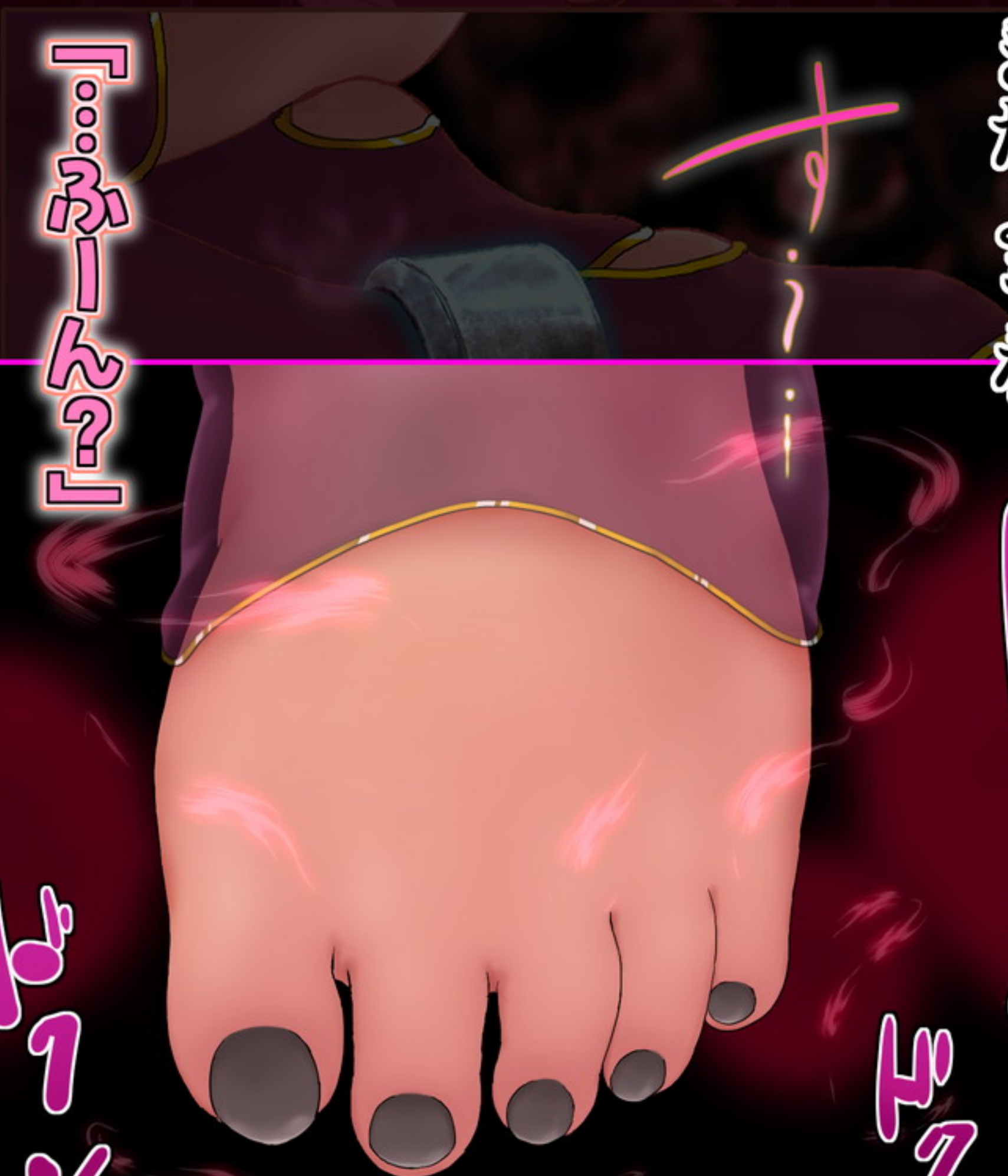
足かせではなく  
どうしても足指に  
目が吸い寄せられてしまう







あたりに香りが満ちると共に  
服さえ透けて  
裸足が見えてきたような……



「……ふーん？」

微かな喜色をにじませ  
すっと目を細める少女

ドク／＼  
ドク／＼

ドク／＼

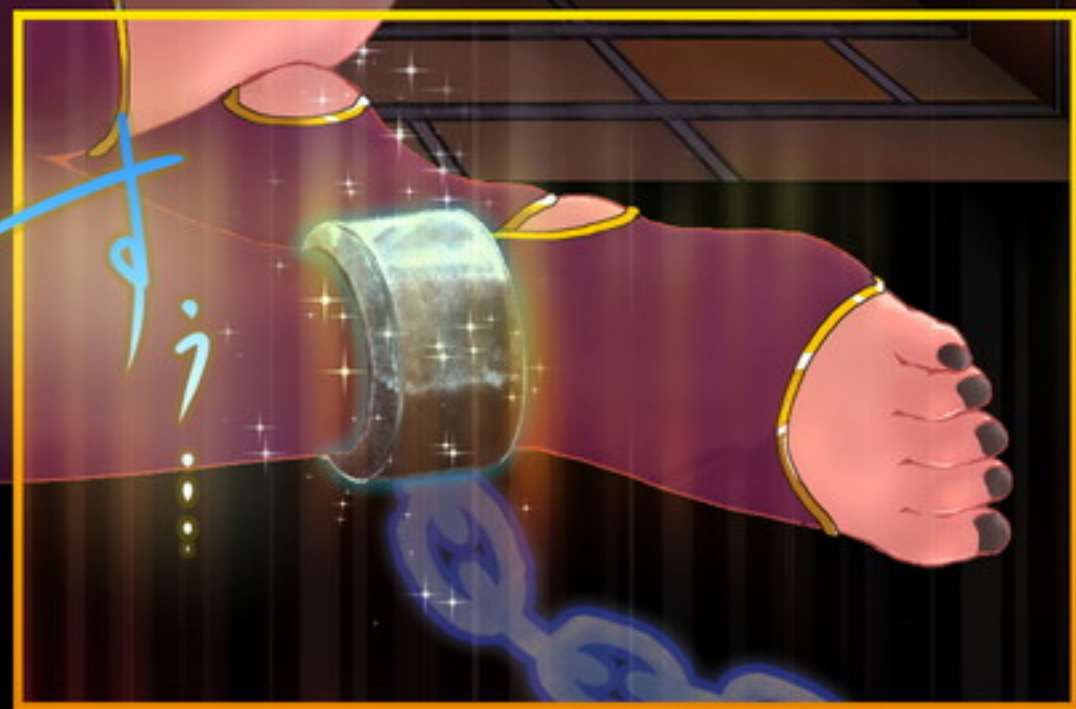


「でもねでもね  
もうすぐ消えると思うんだ」

まるで少女の声に  
応えたかのように

足かせは光の粒となり  
消えていく

にゅにゅ♡





「ほら消えた♪」

ふふー、本当の本当に  
アイツを倒しちゃったんだね」

「足かるーい！  
あはは♪」



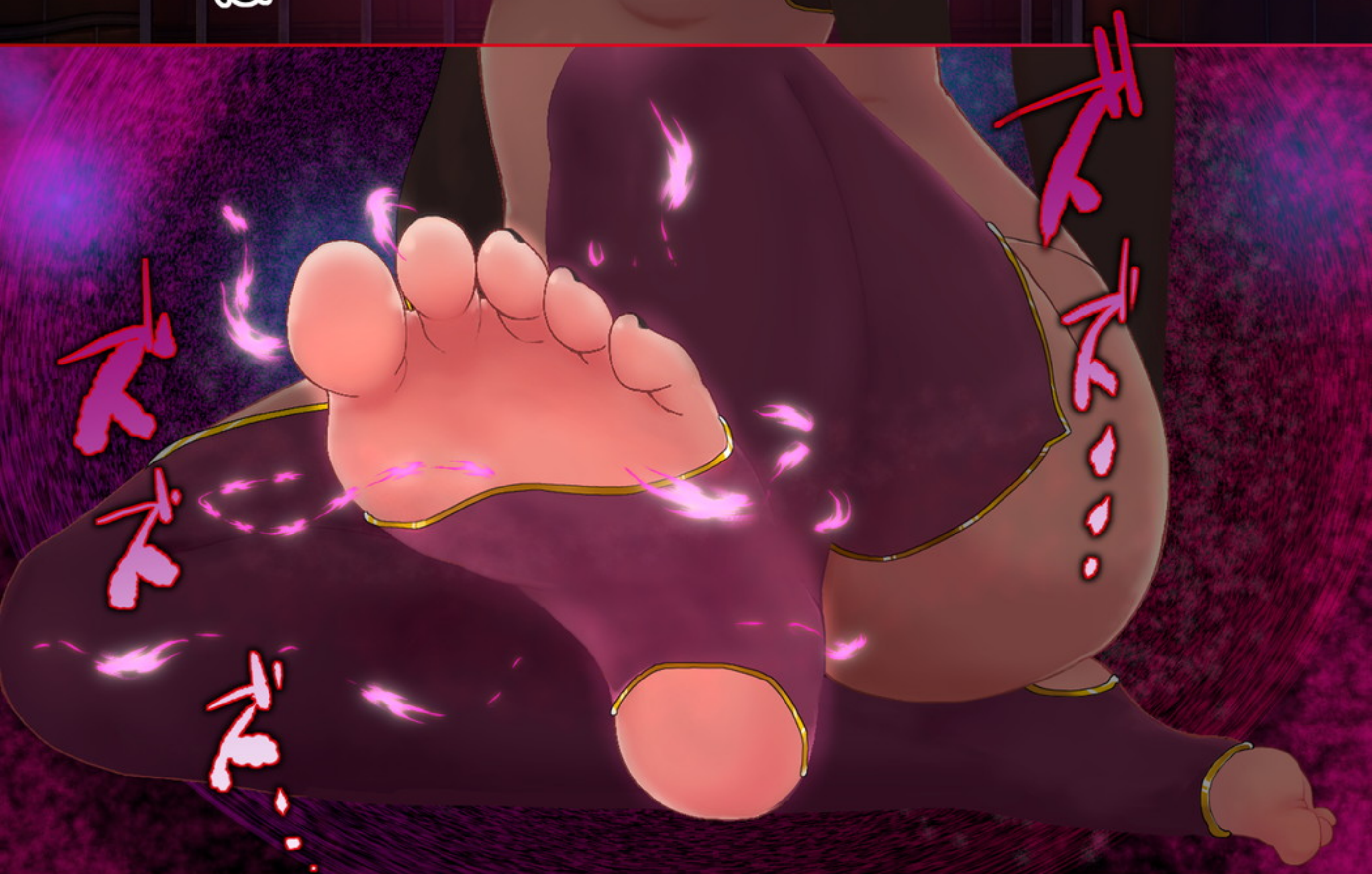


喜びに任せ  
足を自由に振り回す

すると部屋中に  
食欲を誘うような  
南の果実のような…

柔らかく甘い  
独特の香気が濃くなる

鼻から入ったその香りは  
急速に頭の中を  
満たしていく





甘い香気に蕩けた頭に  
今度ばくつきりと  
少女の裸足が浮かぶ

温かく触れると  
ぷるんと弾けそうなのー



「ねえねえ  
これから帰るんだよね  
あたしもついてって良い？」



ぽん



舌ったらずな声にあわせて

耳たぶより柔らかかそうな

足の裏、足指が

目の前でゆらゆらと踊る



...



舌ったらずな声にあわせて

耳たぶより柔らかかそうな

足の裏、足指が

目の前でゆらゆらと踊る

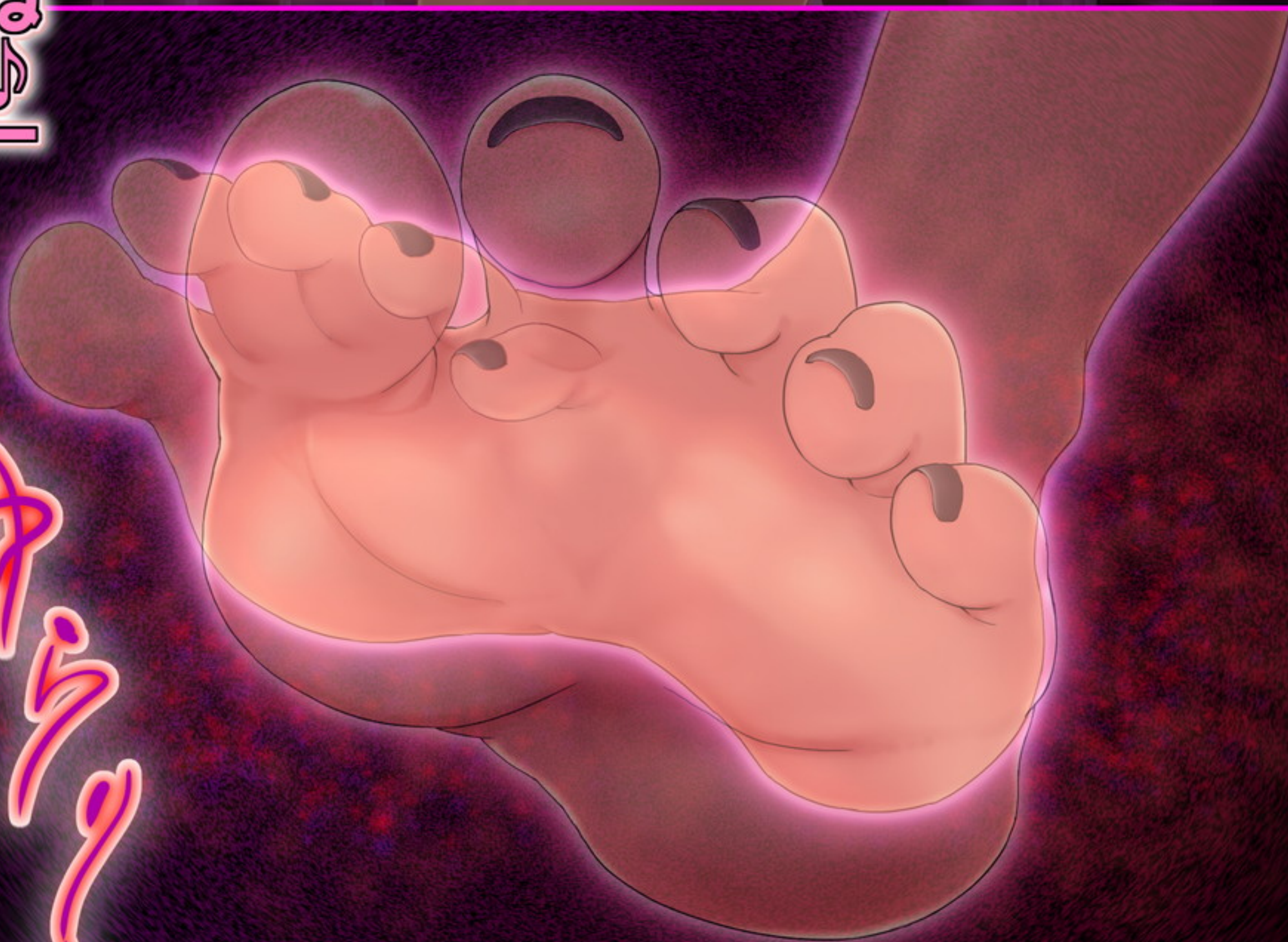


「ひとりじゃ寂しいし

強いおにいちゃんと

一緒にいれば安心だよね♪」

ゆらゆら？





「ねえ、おねがーい」

「一緒にいっただけだから  
ね？ ね？」

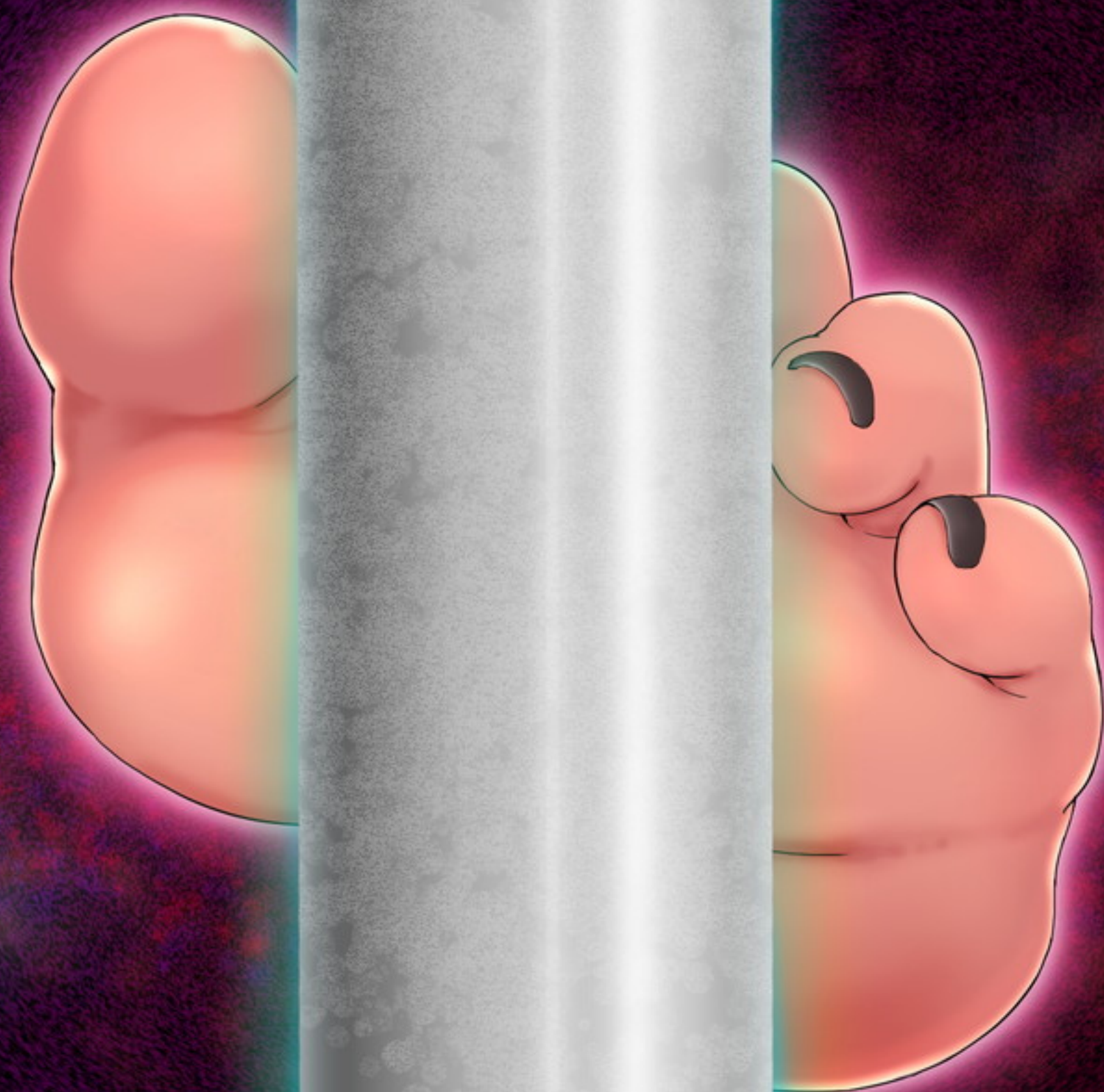


「おにいちゃんと一緒にいたい」の「





見せつけるように足をあげ  
鉄格子に這わせる

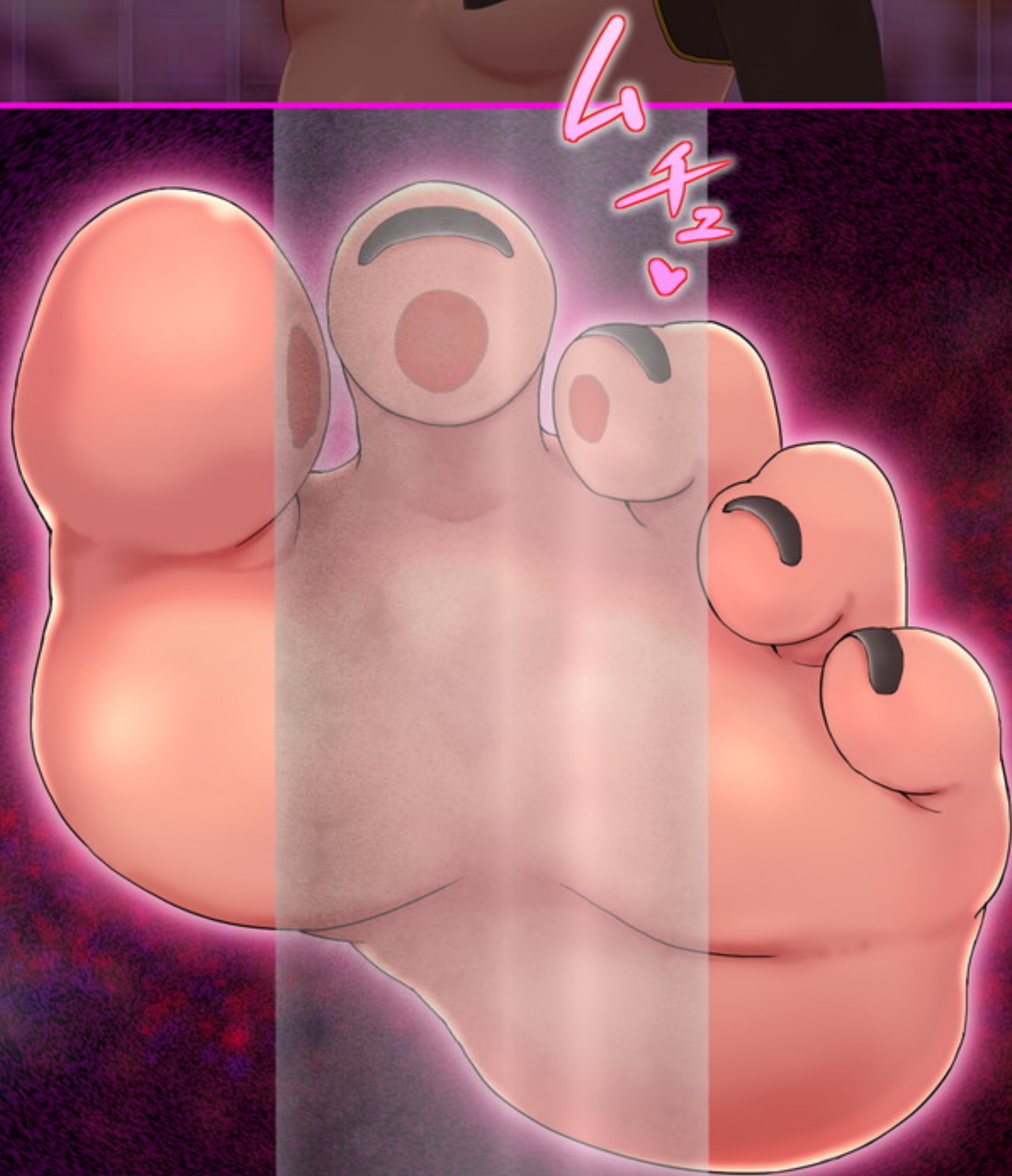




見せつけるように足をあげ  
鉄格子に這わせる



「ぷにゅん」という音が  
可視化したかのように  
柔肉がゆるりと広がっていく

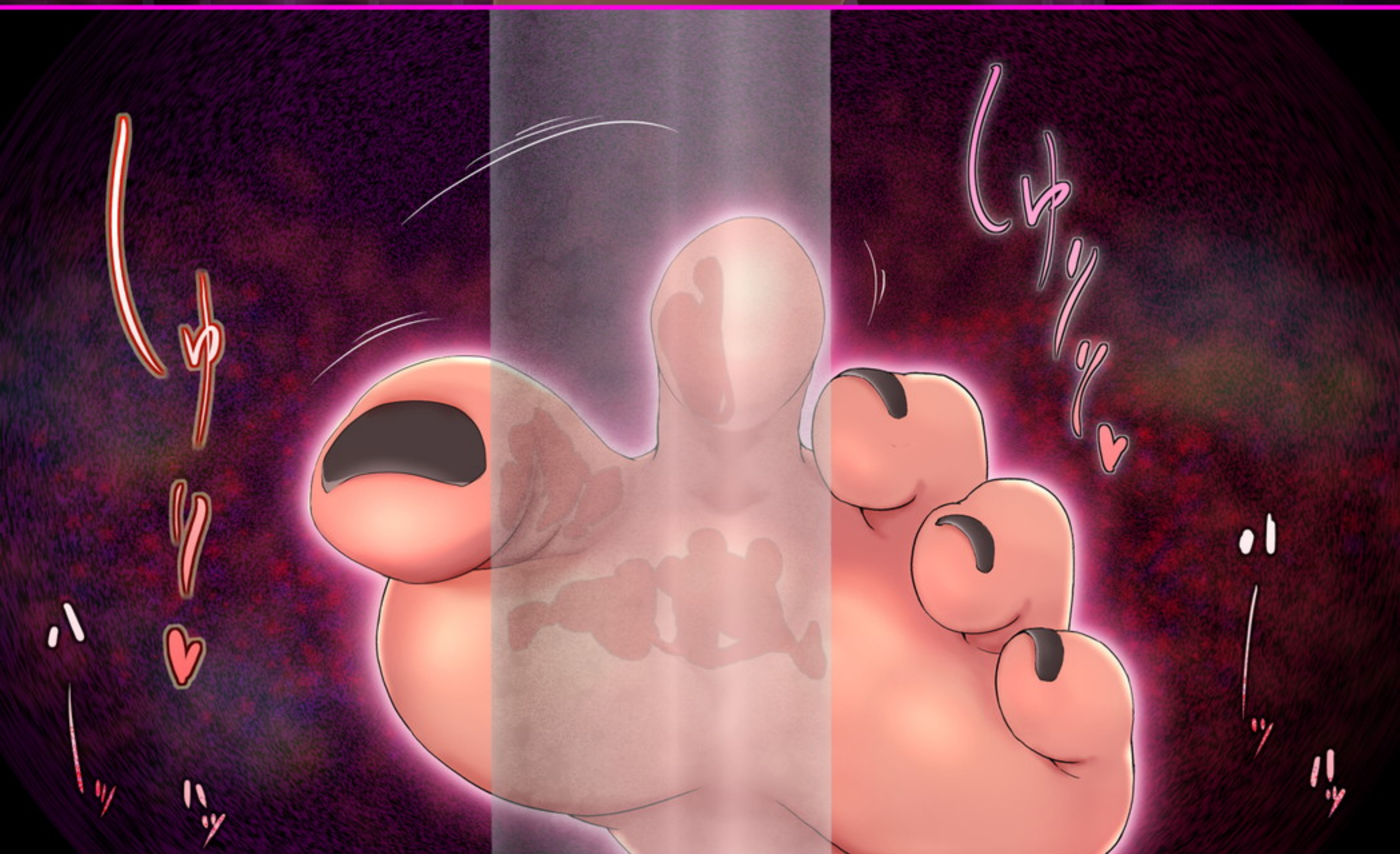




上下にしゅりしゅりと鳴る  
絹地を撫でるような  
棒と素足の奏でる音

聞いていると  
たまらなく体が熱くなる

「一緒にいって良いよね？  
ね？ おにーちゃん？」





少女に、いや少女の足に  
ふらりと引き寄せられる  
そのとき

誰かの手が触れた





少女に、いや少女の足に  
ふらりと引き寄せられる  
そのとき

誰かの手が触れた

勇者様、どうか彼女を  
助けてあげて下さい

姫様はそう言おうと  
じっと僕の顔を見つめた







助かった…

わけもわからず  
その実感だけが  
湧き上がる

確かな安堵の気持ちと  
同時に

未だわきあがる  
甘く強い疼きが  
僕を責める



「これからよろしくね  
おにーちゃん♪」





繋いだ少女の手は  
記憶にある  
誰よりも柔らかく

この世界の何よりも  
愛おしく感じた



# 2

姫と少女を伴い  
最初の宿の最初の夜  
思い出すのは、あの香り





褐色ろりさきゅばすの  
ぷにあしで墮とされちゃう！

2019年2月中旬発売予定！

おたのしみに！

